
今日は死ぬには良い日

傘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日は死ぬには良い日

【Nコード】

N77260

【作者名】

傘月

【あらすじ】

「今日は死ぬには良い日」をテーマに傘月と不可が無茶振りリレー小説を展開していきます。

たまたま同じ日に自殺しようとした男女が出会って、さあどうなる着地点なんて考えて無いのでどうなるかは神のみぞ知る、神の味噌汁。

そんなドッキドキのリレーを繰り広げていこうと思っています。テーマがテーマなので基本ダーク。基本シリアス。

「起」(傘月サイド)

昼間の晴天で思い立って出掛けた帰り、白縄文人は暮れがかった空を見上げて一つため息をついた。

目の前の空を覆うように広がる鱗雲の切れ間から赤く焼けた空が見える。まさに秋の夕暮れといった趣を醸し出し、背後からゆつくりと夜が迫ってくるのを感じた。急がなくては。文人は歩く速度を速めた。急がなくては、今日中に身辺整理が終わらない。

横断歩道の信号は赤。仕方なく立ち止まり焦りの気持ちも抱きつつ空を見上げると、向かいの道にかかった歩道橋の上で右往左往している人間がいることに気付いた。その人間はあっちからこっちから下の歩道を見比べ、たまに空を見上げては、あっちからこっちからとまた下の歩道を見比べる。

もしかして。なんとなく胸騒ぎがしたので青に変わった横断歩道を渡り、歩道橋を登る。歩道橋の上に立つと夕焼け空に向かって進んでいたのが夕焼けと平行する形になる。右に夕焼け空を望むその橋の上では、一人の女が下から見たときと同様に右往左往していた。ゆつくりと近づこうと一歩踏み出した。すると女はこちらに気付いたようで、ふっと顔をこちらに向けた。長い髪が一筋流れ、見えた顔は焦りの表情。そして文人を認識すると、いたずらの見つかつた子供のような、ちょっと怯えた表情をした。気付かないふりをつつ、ゆつくりとその場を通り過ぎるように文人は歩く。

「そこから飛び降りても死ねないよ」

女とすれ違う瞬間、文人は唐突に立ち止まってそう呟いた。ヒッ、と女が息を詰めるのが解った。

「ああ、止めるつもりはないよ。俺もこういうヤツだから」

女の方を向いて、文人は左腕の長袖をまくっておもむろに左手首を女の前に出した。女はそれを見て、ホーッ、と長い安堵のため息をついた。

文人の左手首には、無数のリストカットの痕が刻まれていた。まさかこの痕がこんな形で水戸のご老公の紋所のような役割をするとは思っても寄らなかったが、これも運命なのだろう。

「困ってたんです。ほら、ここってこの時間、こちら側が夕焼けで、向かい側が夜ですよね？」

「そうだね」

そう答え、右に夕焼け、左に夜を望むこの場所はまるで何かの境界線のようなと文人は思った。

「夕焼けに死ぬか、夜に死ぬかずつと悩んでいたんです。早くしないとどちらも夜になってしまうから、焦っちゃって、でも決められなくて」

「奇遇だね。俺も今日死のうと思って身辺整理の途中だったんだよ。ただここからじゃ確実に死ねないよ」

歩道橋の高さはせいぜい二階建ての建物程度。人が死ぬには四階建て以上がベストというのはまことしやかに噂される話であるがおそらくそれは本当の話なのだろうと、文人はいつも高いビルに登ると常々思っていた。

「車に撥ねて貰います。家族に迷惑をかけたいんです」

「確かに、車の通りは激しいね。でも、車に撥ねて貰ったとしても

確立は結構低いよ。家族に迷惑をかけるならもつと別のやり口がある」

「例えば？」

「家族とは同居？」

「はい」

「だったら自宅で首つりとかのほうがずっと効果的だよ、第一発見者の家族は何を思うだろうねえ」

文人はこの女が首をつって死んでいるところを家族が発見するところを想像して、思わず愉快な気分になった。首つり死体というのはなかなか見応えのある死体になる。顔は鬱血して目や舌が飛び出て、糞尿が垂れる。想像を詳細にしていけばしていくほど、愉快な気持ちに拍車が掛かった。

「……でも、ここから飛び降りるのも捨てがたいんですよ。こう、夜に死ぬか夕暮れに死ぬかを考えられるのが、神様が私にくれた最後のプレゼントな気がして。とても楽しいんです。これから死ぬるのが楽しみっていうのもあるんですけどね」

女はそう言うにつこりと笑った。ずっと口角のさがったぶすつとした顔つきだったから解らなかったが、笑うと女は結構可愛らしい顔をしていた。

「まあ、最終的には君の自由だよ。ただここだとうっかりすると半身不随とかになって、家族に介護される人生になるよ。ある意味、それも家族に迷惑をかけていることになるけどね」

「家族に介護されるなんて嫌です。死んだ方がマシです。だから死にます」

笑っていた女の顔がキュッと真面目な顔つきになった。その目に

浮かぶのは人生への絶望より、家族への憎しみが感じられた。自分もそんな目をしているんだろうかと、文人は考えた。

「まあでも、良い案ではあるね、ロマンに溢れてる。自殺のことを考えるのはいつの頃からか趣味のようになっていたけど、君みたいなロマン溢れる案は思いつかなかったよ」

「そう、ですか？　なんか、変に褒められちゃったなあ」

女は嬉しそうな、困ったような複雑な表情になった。確かにこんなことで褒められたら、どうすればいいのか解らないだろう。自分だってそうだ。

文人は目線を女から空へ焦点を変えた。女の背景の夕焼けはほとんどん夜に浸食されていく。

「貴重な時間を取ってしまって申し訳なかったね。もう夜になってしまっ」

「あら本当。嗚呼、どうしよう、どうしよう」

「それなら……」

自殺についてならいくらでも考えつくと思っている文人は、少し考え込んだ。

続く（可不可サイドへ）

「起」(傘月サイド)(後書き)

ついに始まりました。仲良し不可さんのリレー小説企画！

「今日は死ぬには良い日」でお互いにリレー小説を展開していきます、ということ毎日常更新を目標にたらたと書いていきます。

ということ傘月からの書き出しでした。

実際に散歩していたときに歩道橋を登ったことからこの小説は生まれました。

「承」（可不可サイド）

「君、集団自殺は潔しとしない人？」

黒く茜くろかわあかねがおたおたしている間に、目の前の男性は考えを纏め上げてしまったらしい。

見ると、夜に食われた空よりも、その瞳はさらに深い墨色をしている。

きつとこの人が私の立場だったなら、迷いもせず飛び降りることができたのだろうな、と彼女は的外れなことを考えた。

「どうやら死に損なってしまったようだからね。俺のせいだとは思わないが、これも何かの縁だろう。ついてくるといい」

そう言い残して、彼は歩道橋を下りていってしまった。

茜は逡巡したが、手すりの向こう側に見える地平は、既に黒に覆われてしまっている。

赤と黒の狭間に身を投じるのが自分の死に様とすれば、今はそのときではない。

彼女はそう判断し、後を追うように歩道橋を駆け下りた。

男性の斜め後ろ四十五度のあたりをキープしながら、茜は次の言葉を待った。

ついてこいと言うからには、話したいこともあるのだろう。

いや、もしかしたらそんなことはないのかもしれない。

その程度の気まぐれさは持ち合わせていないと、逆に不自然な人格のようにも思えた。

二人の歩道を歩く音と、往来を行き交う車の音が周囲を支配する。

「あの」

沈黙に耐えられず、先に口を開いたのは茜だった。

「集団自殺って、どういうことですか？」

「二人でも集団は集団だろう」

即答だった。

茜は面食らう。

「それはそうですね」

つまり、どういうことなのか。

自慢ではないが、茜は頭の回転が速い方ではない。

頭が悪いとは思っていないが、とにかく処理速度に難がある。

学生時代のテストにおいても、正答率こそ非常に高いものの、全問解き切ったことは一度もなかった。

そのため、彼の言っていることの真意に思考が及ぶまで、十数秒を要する。

「え、もしかして、一緒に死んでくださるんですか？」

間の抜けた響きだが、それでも大枠を外してはいらないはず。

案の定、茜の至った解に、男性はにやりと微笑した。

「君がそう解釈したなら、そういうことなのかもしれないね」
妙なことになったものだ。

彼はどうにも掴みどころがない。

しかし、不思議と悪い気はしないのも事実である。

茜はこの男性にある種の興味を持ち始めていた。

彼女は自分の命に対する執着こそないが、それは生に対する興味をまるで失ったということではない。

自分の命と家族の不幸を天秤にかけたとき、命を犠牲にしても家族を不幸にしてやりたいという意志が勝っただけである。

「別に一緒になくても構わない。俺はもともと一人で死ぬつもりでいた。ただ、君さえ望めば俺は君に最適の自殺方法を教えることができる」

何か裏がありそうだと茜は直観したが、持ち前の回転の遅さがここでも悪さを働く。

「条件があるような口ぶりですね」

自然、口調は棘のあるものになってしまった。

棘の切っ先は自分に向いているというのに。

「そう難しく考える必要はないよ。俺は身辺整理の途中だと言ったはずだ。要はそれを、手伝ってくればそれでいい」

一度も振り返らずに淡々と話す彼の歩き姿は、揺るぎない意志の強さを茜に感じさせて止まなかった。

辺りが完全なる夜闇に覆われた頃、彼は山際の民家に入っていた。

茜は躊躇したが、結局お邪魔することに決める。

乗りかかった船から降りるのは性分に反するのだ。

気になるのは、窓から明かりが漏れていたことである。

身辺整理というものは一人でひっそりとやるものだという先入観から、彼女は小首をかしげつつ後に続いた。

玄関を上がり、男性は迷いなく奥の部屋を目指す。

和洋折衷の廊下は薄暗く、寂しげな雰囲気を醸し出していた。

茜も急いで靴を揃え、ぱたぱたと追いかける。

「お袋、元氣か」

彼は横開きの扉を開け、顔だけを覗かせた。

中にいるのはお母上様らしい。

しばらく反応がなかったが、やがて中から弱々しい声が返ってきた。

「フミかい？」

息子の顔も忘れたか、と悪態をつきながら、彼は扉を開け放って部屋に入っていく。

またも認識に時間がかかったが、これは自分にも同行しろということなのだ、茜は数刻遅れて気がついた。

「親父はいないんだな」

茜が部屋に入ると、男性は上着を脱いで正座したところだった。

その奥で、頬のこけた年輩の女性が横になっている。

一目でもう長くないことが伝わってきた。

茜は慌てて男性の右隣に正座する。

うつすらとだが、横たわる女性には隣に座す男性の面影が見てとれた。

「もうすぐ帰ってくるはずだけどねえ。近頃は殊に遅いんだよ」

そう言って笑う女性の顔には、諦観の二文字。

何か深い家庭事情があることは瞭然であった。

「そうか。今日は報告があつてきたんだが」

男性はきつと、お父様がこの時間帯にいないことを知っていてやってきたのだろう。

何だか急ぎ足だったことにも説明がつく。

彼はきつと会いたくないのだ、実の父に。

茜は自身の家庭を思い出しそうになって、慌ててその思考回路を遮断した。

今この場で考えるべきことではない。

彼女は軽く首を振る。

すると。

「結婚することになった」

端的に、非常に端的に男性は述べた。

茜は危つく、そうなんですかよかったですね、などと祝福しそうになって、自分のおかれた状況に硬直した。

お母上様から見て、男性の結婚相手は明らかに茜のはずである。

図られた。

「だから、しばらくは身の周りが慌ただしくなる。なかなか顔を出せなくなるかもしれないが、その間、息災でな」

茜は男性の真意を測りかね、憤懣に満ちた表情で彼の方へ顔を向けた。

が、その笑顔の裏にある漆黒の表情を垣間見る。

お母上様の角度からは、その陰のある顔は窺えなかったことだろう。

「そうかい、よかったねえ、綺麗な人で。息子をよろしく願いますよ、わたしはご覧の通り、もう長くないものでねえ」

「滅多なことを言うんじゃない」

諭して、男性は立ち上がった。

その背中には、背徳の二文字を背負っている。

「俺はこれで帰るよ。親父が帰ったらよろしく頼む」

茜は、何と云っていいやら分からず、ただただ涙するのを必死に堪えていた。

（可不可サイド 続く）

「転」 傘月サイド

家を出るとすっかり辺りは夜の気配に満ちていた。

ああ言えばもつと驚くモノだと思っていたが、女は黙したまま、背後斜め四十五度付近を保って着いてきている。

「……………特に質問は無し？」

そういう意味合いは無かったが、文人の放った言葉は意地の悪そうな雰囲気で響いた。

背後の女は少し動揺したようで、あ、その、えっと、等々もごもごと口元でとどまるような言葉が耳に届く。

下がった口角の顔つきからおっとりというより鋭い感じを覚えたが、どうやら頭はそう鋭く動かない質の人間らしい。

「何故、あのようなウソを」

やつのことを出したと見える言葉は、困惑した声だった。

「ただの身辺整理の一環さ」

あっけらかんと文人は答える。

「今にも死のうと思っている自分より先に死ぬかもしれない母親を安心させておこうと思ってるね」

「じゃあ、お母様が死ぬより早く死ぬことはしないのですね」

残念なような、しかしどこかホッとしたような声が背後から投げかけられる。

もう少し頭の周る女だと思っていたのに。文人は苦々しく思いつつ、言葉を返した。

「今にも死のうとしていると言っただろ。俺は今日にでも死のうと思っている」

発した言葉は、思った異常にとげとげしくなった。

「あ、え、ご、ごめんなさい」

その雰囲気察してか、女がサッと謝罪の言葉を返す。

愚鈍だから周囲の人間と合わずに自殺を考えたのだろうか、とい

った考えが文人の脳裏を過ぎった。

「……僕の身辺整理での一番の重荷が母親だったんだよ」
そう言って文人は空を仰ぎ見た。星が一つ、輝いている。

「こっちは今にも死にたいと思っっているのに、あつちは病人で今にも死にそうだ。何の恩返しもなく先に死んだらあの世で再会したとき居心地が悪いだろう？」

あの世なんて、あるとは思っていないけど。という言葉で文人は飲み込んでおいた。

「それに俺は母親には恨みがないからね」

一拍おいて、頭の回らない女にもこちらが真意だと解るように、念を押すように呟く。

「……ハハオヤにはウラミがない……」

女にも伝わったのか、女は自分に念を押すように同じ言葉を呟いた。

まるでそれが、異国の言葉であるかのようなイントネーションで。何かひっかかるものでもあるのだろうか、と思いつつ、文人は少し先の曲がり角で立ち止まる。

振り返ると、距離がいつの間にか少し開いていたようで、女がパタパタと駆けてきた。

「あそこが僕の家だ。詳しい話はそこでしよう」

女が追いつくと、文人は少し先に見えるアパートを親指で指してそう言った。

文人の部屋はワンルームで、天井まで届くほどの大きな本棚と座卓以外何もない。

そんな殺風景すぎる部屋をきよろと見渡す女に座るように勧め、文人は座卓をはさんで女と向かい合わせになるように座った。

「悪いね。座布団も売ってしまったんだ。フローリングに直に座るのはちょっと辛いかな」

「あ、いえ、大丈夫です。お構いなく」

女はそう言うのと、またぐるりと辺りを見渡し、あらためて文人に顔を向けた。

「何にも、無いんですね」

「そりゃあね。前はその本棚を埋め尽くぐらい本があったし、人並みの生活ができる程度の家具や電子機器やパソコンもあったけど、全部売ってしまったんだ」

「……身辺整理、ですか」

言葉では解った風な口をきいているが、顔には「なにもここまですなくても」と書かれていた。

「なぜ、このテーブルだけ残してあるんですか？」

純粹な質問のようだった。

「自殺のためだよ。首つり自殺をするときには台が必要だろ？」

「じゃあ、自殺は首つりを？」

「いや、風呂場においてある洗剤を使う。ただいざとなったとき選択肢は多い方が良い」

「……ああ、洗剤を混ぜて毒ガスを出すアレですね」

女は納得した顔でそう言うのと、また少し思案するような顔つきになった。

「え、でもそうすると、このアパートだとガスが漏れて、他の部屋にも被害が及ぶんじゃないんですか？」

文人のアパートは結構な年季の入ったもので、先ほどから隣の部屋で見ているであろうテレビの音が漏れ聞こえていた。

「そう、そこが今回のポイントだよ」

文人はにつこりと笑うと、続けて説明した。

「このアパートの大家は俺の父親なんだ。ここで俺がガスなんてただ漏れさせて、さらに人が死んだとなればここの物件価値は大幅に下がるだろう」

「でも、近所の方が巻き添えになる可能性が……」

「そうになったら儲けモンだ。老い先短い母親は責任を負う前に死ぬだろう。責任は全て父親に行く。そこがポイントだ」

考えただけでも気分の良くなる自分の自殺計画を口にすると、文人はさらに気分が良くなった。

「……お父様が、お嫌いなんですね」

ゆつくりと時間をかけてから、女は納得がいったようにそう口にした。

「そう、その通り」

文人は気分の良いまま、にこにこして肯定する。

「君にして貰いたいことは二点のいずれかだ。一つは、僕と一緒に死ぬなら心中という形にして欲しいということ」

そう言つと、文人はスツと人差し指を立てた。女は居住まいを正してじつと文人を見る。

「もう一つは、もし僕と別に死ぬというなら僕の後に残りて欲しいということだ。できれば、僕の後を追うような形に仕立て上げてくれると嬉しい」

中指も立てて、はさみの形になった手を顔の横に示しつつ文人はそう言った。

女は口を真一文字に結んで、すこし目を伏せてなにかを考え込み、ゆつくりと飲み込むように頷いた。

「つまり、先ほどの婚約者の話を崩さぬ形で私に残りて欲しい、ということですね」

「そういうこと。あ、もしかして他に彼氏いたかな？ 何か不都合な点はある？」

「いえ、恋人はいないですし、そもそもいても、カゾク、には教えません。何も不都合な点はありません」

キュツ、と真面目な顔つきになって女は答える。

家族という所が妙に強調されているように聞こえた。

「……なるほど。君の自殺には家族が大いに絡んでいるんだね」

はさみの手をひっこめて、文人は両手を後ろについて大きくのけぞり、天井を仰ぎ見た。蛍光灯の白い明かりが目刺さるようにま

ぶしく感じる。

ゆっくりと目を閉じる。視界が暗転して、昔の記憶が目には浮かんでくる。

「そういえば、僕の名前について話をしていなかったね」

「そういえば、私の名前も話してませんね」

「君の名前は？」

「くろかわ……黒く茜です」

「いい名前だね、君が夕焼けにこだわる理由も分かった気がする。

茜は夕焼けの色だからね」

「そういつつもりじゃなかったんですけど……あ、でも無意識にそう思っていたのかもしれないです」

自分にもそういう意義ある名前が与えられていればもっと違う人生だったのかもしれない。

文人は名前に呪われた人生を振り返りつつそう思った。

「俺の名前は白縄文人だ」

「しろなわふみひと……いいお名前じゃないですか」

茜と名乗った女が発した言葉は、たとえそれが社交辞令だったとしても文人にとって許せない言葉だった。

グツと姿勢を直して、茜を睨む。

「いい名前だあ？　俺はこの名前に呪われて、この名前に死ぬんだ。お前に何が解る」

「えっ？！……あつ、す、すみません！」

いきなりの凄みに気圧されたのか、茜は身を縮ませてさつと頭を下げた。サラリと長い黒髪が流れる。

イライラしながらも、何も知らない茜にいきなり凄んでしまったことをすこし後悔しつつ、文人は下げたままの茜の頭のつむじを見ていた。

そしてため息を一つつく。

「……いや、ごめん、俺が悪かった。君は何も知らない」

その言葉にゆっくりと様子をうかがうように茜は顔を上げた。怯

えた表情が張り付いている。

「白縄文人。色のシロに首つりに使うナワ、そして矢文のフミにヒトと書く。並べて書くとどうなると思う？」

「えっ？」

いきなりの問いに、茜の怯えた顔に疑問が浮かぶ。

茜はゆっくりと左手を開いて、右手で何かを書くようにその上で動かす。

「シロ、ナワ、フミ、ヒト………？」

「そこから一番上のシロを抜いてみて」

「………あつ、縄文人」

「そう、ジヨウモンジンだ」

言いながら過去を反芻して、文人は苦虫を噛み潰したような表情になる。

「その名前を付けたのが、俺の父親なんだ」

（傘月サイド 続く）

「転」 傘月サイド（後書き）

フォーマットを可不可さん寄りにするべく一文節を短く書くということに挑戦。

そして玉砕。

おかげで何度書き直したことが。

そして書き直しのおかげで毎日更新という目標がもろくも崩れ落ちました＼（＾o＾）ノゴメンナサイカフカサン

そして書き直した完成原稿に可不可さんからどれだけダメだしを食らったことか＼（＾o＾）ノカフカサンマジメンゴ

次回か「結」で最終回になりますが、はたして終わるのでしょうか。悪球打ちに定評のある可不可さんがここからどう終わらせるか期待です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7726o/>

今日は死ぬには良い日

2010年11月11日23時55分発行